

被害応急調査結果

1 概況

(1) 気象概況

－気象庁資料からみた、令和2年の月別の気象概況は、次のとおりである－

1月 東・西日本では記録的な高温となった。日本海側を中心に降雪量は記録的に少なかった。沖縄・奄美では、降水量がかなり少なく、日照時間がかなり多かった。

冬型の気圧配置が続かず、低気圧や前線が本州付近を通過することが多かったため、全国的に天気は数日の周期で変わり、日照時間は東日本太平洋側ではかなり少なく、西日本でも少なかった。一方、寒気の影響が小さかった北日本日本海側では多かった。また、冬型の気圧配置が続かず、全国的に寒気の南下が弱かったため、北・東・西日本の降雪量はかなり少なかった。北日本日本海側の降雪量平年比は31%、東・西日本日本海側では0%となり、1月としては1961年の統計開始以降で少ない記録を更新した。また、西日本太平洋側も0%となり、1972年と同値だった。北日本日本海側は降水量もかなり少なくなり、平年比64%と1月としては1946年以降で最も少なかった。沖縄・奄美は、高気圧に覆われやすかったため、降水量はかなり少なく、日照時間はかなり多かった。

気温は、全国的に期間を通して寒気の南下が弱く、上旬後半と下旬には低気圧に向かって暖かい空気が流れ込んで顕著に高くなった。このため、月平均気温は東・西日本と沖縄・奄美ではかなり高く、北日本では高かった。東・西日本ではそれぞれ平年差+2.7℃、+2.8℃と1月としては1946年以降で1位の高温となった。地点で見ると、全国の気象官署153地点のうち105地点で高い方から1位の値を記録した(タイを含む)。

2月 気温は、全国的に高く、東日本でかなり高かった。日本海側の降雪量は、北・東日本日本海側でかなり少なかった。沖縄・奄美では、降水量がかなり少なく、日照時間はかなり多かった。

上旬には北日本で強い寒気の影響を受けた時期があったほか、中旬には低気圧や前線、一時的な寒気の影響で北日本から西日本で曇りや雪または雨の日が多い所があったものの、全般に日本付近は高気圧と低気圧が交互に通過し、冬型の気圧配置となる日が少なかった。このため、天気は数日の周期で変わり、北・東・西日本日本海側では曇りや雪または雨の日が少なかった。南から暖かい空気が流れ込んだ時期もあったため、月平均気温は東日本でかなり高く、北・西日本と沖縄・奄美で高かった。月降雪量は北日本日本海側、東日本、西日本太平洋側でかなり少なく、北日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった。沖縄・奄美では、移動性高気圧や日本の南海上の高気圧に覆われることが多かったため、月降水量がかなり少なく、月間日照時間はかなり多かった。

3月 北・東・西日本では、気温がかなり高かった。降水量は、北日本太平洋側でかなり多かった。北・西日本と東日本日本海側では、日照時間が多かった。

高気圧と低気圧が日本付近を交互に通過し、全国的に天気は数日の周期で変化した。低気圧は日本海から北日本付近や本州南岸を通過しやすく、北日本と東日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美では、低気圧や前線、南からの湿った空気の影響で月降水量が多く、北日本太平洋側ではかなり多くなった。特に日本海から北日本付近にかけては、たびたび低気圧が発達しながら通過し、北日本を中心に大雨や暴風、高波となった日もあった。一方、全国的

に上旬は低気圧の影響を受けやすかったが、中旬以降は大陸から移動してきた高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、月間日照時間は北・西日本と東日本日本海側では多かった。気温は、中旬に大陸から寒気が流れ込んで、沖縄・奄美を中心に平年を下回る時期もあった。また、29日は南岸低気圧の影響で東日本を中心に寒気が流れ込み、大雪となった所があった。全体としては、冬型の気圧配置は現れにくく、南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、気温は全国的に高く、北・東・西日本ではかなり高くなった。特に北日本では、月平均気温平年差が+2.5℃となり、3月としては1946年以降で1位の高温となった。

4月 西日本と沖縄・奄美では、気温がかなり低かった。降水量は、北・東日本で多く、沖縄・奄美でかなり少なかった。東日本太平洋側と西日本では、日照時間がかなり多かった。

高気圧と低気圧が日本付近を交互に通過し、全国的に天気は数日の周期で変わった。上旬は北日本付近、中旬は本州付近を低気圧が発達しながらたびたび通過したため、北・東・西日本では大荒れの天気となり、まとまった雨や雪となった所もあった。また、上空の寒気の影響で下旬を中心に大気の状態が不安定となり、関東甲信地方を中心に雷雨となった所もあった。このため、北・東日本の降水量は多かった。一方、沖縄・奄美では湿った空気の影響を受けにくかったため、降水量はかなり少なかった。東日本太平洋側と西日本は移動性高気圧に覆われる日が多かったため、日照時間はかなり多かった。

気温は、大陸からの寒気の影響を受けやすかったため、全国的に低く、特に西日本と沖縄・奄美では、それぞれ平年差-1.2℃、-1.5℃となり、4月の気温としては2011年以来9年ぶりになりかなり低くなった。

5月 気温は全国的に高く、北・東・西日本でかなり高かった。東日本日本海側では降水量がかなり少なかった。沖縄・奄美では降水量がかなり多く、日照時間は少なかった。

北・東・西日本では、月の前半は、低気圧と高気圧が交互に通過し、天気は数日の周期で変わったが、低気圧は日本海から北海道付近を通過しやすかった。後半は、オホーツク海高気圧が発生し、北日本太平洋側を中心に冷たく湿った気流の影響を受けた時期があった。また、低気圧や前線の影響で九州南部で日降水量が200mmを超えた所があるなど、西日本から東日本太平洋側にかけて大雨となった所もあったが、東日本を中心に高気圧に覆われ晴れる日が多かった。月降水量は、南からの湿った空気の影響を受けにくかった東日本日本海側でかなり少なく、北・東日本太平洋側で少なかった。月間日照時間は、高気圧に覆われやすかった東日本太平洋側で多かった。気温は、オホーツク海高気圧の影響を受けた時期があったものの、月を通して見ると南からの暖かい空気に覆われやすかったため全国的に高く、晴れやすい時期のあった北・東・西日本ではかなり高かった。

沖縄・奄美では、月を通して、前線や南からの暖かく湿った空気の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多く、大雨となった所もあったため、月降水量はかなり多く、月間日照時間は少なかった。

6月 気温は、全国的にかなり高かった。降水量は、沖縄・奄美でかなり多かった。日照時間は、東日本日本海側でかなり多かった。

北・東・西日本では、上旬を中心に高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、中旬は梅雨前

線が本州付近に停滞しやすく、曇りや雨の降る日が多かった。沖縄・奄美では、上旬は梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多かったが、中旬を中心に高気圧に覆われて晴れの日が多かった。このため、月間日照時間は東日本日本海側でかなり多く、東日本太平洋側と西日本日本海側、沖縄・奄美で多かった。一方、太平洋高気圧は日本の南海上で西へ張り出しやすく、高気圧の縁を回って日本付近に湿った空気が入りやすい時期もあったことから、梅雨前線の活動が一時的に活発となって、沖縄・奄美と西日本では土砂災害や浸水害を伴う大雨となった所があった。このため、月降水量は沖縄・奄美でかなり多く、東日本太平洋側と西日本で多かった。また、下旬を中心に北日本では低気圧の影響を受けやすい時期があったため、北日本日本海側の月降水量も多かった。

気温は、太平洋高気圧が日本の南海上で西へ張り出し、日本付近には暖かい空気が入りやすく、晴れて強い日射の影響を受けた日もあったため、全国的にかなり高かった。東・西日本では平年差がそれぞれ+1.9℃、+1.4℃で、東日本では1946年の統計開始以来6月として1位の高温となり、西日本では2005年と並び最も高温となった。

7月 「令和2年7月豪雨」が発生。北日本太平洋側と東・西日本で日照時間はかなり少なかった。気温は、西日本でかなり低く、東日本で低かった。

太平洋高気圧は日本の南海上で強く、その縁辺を回る湿った空気の流れ込みやすかったため、活動が活発な梅雨前線が本州付近に停滞した日が多かった。特に、上旬は日本付近で偏西風の蛇行が続いて黄海付近が気圧の谷となり、梅雨前線の活動が非常に活発となって東・西日本付近に停滞し続けたため、東・西日本を中心に各地で長期間にわたって大雨となった。熊本県、鹿児島県、福岡県、佐賀県、長崎県、岐阜県、長野県では大雨特別警報が発表されるなど、7月を通して断続的に河川の氾濫や土砂災害などの甚大な被害が発生した（「令和2年7月豪雨」）。東・西日本の月降水量はかなり多く、東日本太平洋側、西日本日本海側、西日本太平洋側の月降水量はそれぞれ平年比245%、222%、240%となり、7月として1946年の統計開始以来第1位の多雨となった。

梅雨前線や東からの湿った気流の影響を受けやすかったため、東北地方から東・西日本では曇りや雨の日が多かった。このため、月間日照時間は北日本太平洋側と東・西日本でかなり少なかった。東日本日本海側、東日本太平洋側、西日本日本海側、西日本太平洋側の月間日照時間はそれぞれ平年比40%、41%、50%、57%となり、7月として1946年の統計開始以来第1位の寡照となった。一方、高気圧に覆われて晴れた時期もあった北日本日本海側の日照時間は平年並だった。

曇りや雨の日が多かったため日射が少なく、北からの冷たい空気の影響を受ける時期もあったため、月平均気温は西日本でかなり低く、東日本で低かった。7月として西日本でかなり低くなったのは、2003年以来17年ぶりだった。

沖縄・奄美では、暖かく湿った空気の流れ込みやすく曇りや雨の日が多かったため、月降水量は多く、月間日照時間は少なかったが、上旬後半から中旬前半や下旬を中心に太平洋高気圧に覆われて晴れた時期もあり、月平均気温は高くなった。

8月 気温は、全国的に高く、東・西日本では記録的な高温となった。東・西日本太平洋側では、降水量は記録的に少なく、日照時間は記録的に多かった。沖縄・奄美では降水量はか

なり多かった。

東・西日本では、勢力の強い太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多かった。一方、北日本では、天気は数日の周期で変わり、月の前半は低気圧や前線の影響で日本海側を中心に曇りや雨の日が多かった。全国的に暖かい空気に覆われやすかったため、気温は高かった。月平均気温は、特に厳しい暑さの日が多かった東・西日本ではかなり高くなり、東日本は平年差+2.1℃で、1946年の統計開始以来、8月として1位の高温となり、西日本でも平年差+1.7℃で2010年と並んで1位タイの高温となった。10日から22日にかけてと25日以降には、全国921地点中100地点以上が猛暑日となる日が続き、17日には浜松（静岡県）で歴代全国1位タイの41.1℃を観測するなど、全国の気象官署のうち11地点で通年の日最高気温の高い方から1位の値を記録した。また、50地点で、通年及び8月としての月平均気温の高い方から1位の値を記録した（日最高気温、月平均気温ともタイを含む）。

湿った空気の影響を受けにくく晴れた日が多かったことから、東・西日本太平洋側では月降水量がかなり少なく、月間日照時間がかなり多かった。東日本太平洋側と西日本太平洋側の月降水量は、それぞれ平年比29%、32%となり、1946年の統計開始以来、8月として、東日本太平洋側で1位、西日本太平洋側で1967年と並んで1位タイの少雨となった。また、西日本太平洋側の月間日照時間は平年比131%となり、8月として1947年と並んで1位タイの多照となった。東・西日本日本海側も月降水量は少なく、北日本太平洋側と東・西日本日本海側で月間日照時間は多かった。北日本日本海側では、上旬を中心に低気圧や前線の影響を受けやすかったため、月降水量は平年より多かった。

沖縄・奄美では、上旬と下旬に台風や湿った空気の影響を受けやすかったことから、月降水量はかなり多かった。特に22日から24日にかけては、台風第8号の影響で大雨や大荒れとなった所があった。一方、中旬は高気圧に覆われて晴れの日が多かったことから、月間日照時間は平年並だった。

9月 気温は、北・東日本でかなり高かった。台風や前線、湿った空気の影響で、降水量は西日本日本海側で多く、日照時間は西日本太平洋側と沖縄・奄美でかなり少なかった。台風第9号と台風第10号の影響で、西日本と沖縄・奄美を中心に大雨や大荒れ。

本州付近に前線が停滞しやすく、高気圧の縁辺を回って湿った空気が入りやすかったため、太平洋側を中心に、曇りや雨の日が多かった。また、上旬には台風第9号と第10号が相次いで沖縄・奄美を通過し東シナ海を北上した。6日には西米良（宮崎県）で日降水量が364.5mm、7日には野母崎（長崎県）で日最大瞬間風速が59.4m/s と、ともに観測史上1位の値を更新するなど、西日本や沖縄・奄美を中心に大雨や大荒れとなった所があった。このため、月降水量は西日本日本海側で多かった。月間日照時間は西日本太平洋側と沖縄・奄美でかなり少なく、北・東日本太平洋側と西日本日本海側で少なかったが、湿った空気の影響を受けにくかった東日本日本海側では多かった。

気温は、上旬を中心に高気圧の縁辺を回って暖かい空気が流入しやすかったことや、台風に向かって強い南風が吹き込んだ時期があったため北・東日本でかなり高く、西日本で高かった。また、北陸地方を中心にフェーン現象が発生し、3日には三条（新潟県）で日最高気温が40.4℃と、全国の気象官署及びアメダスで、9月として初めて40℃を超えた。

10月 気温は北日本で高かった。降水量は東日本日本海側でかなり少なく、東・西日本太平洋側で多かった。日照時間は北日本と東日本太平洋側で少なく、西日本と沖縄・奄美で多かった。

北・東日本では、上旬を中心に低気圧や前線、湿った空気の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多かったため、月間日照時間は北日本と東日本太平洋側で少なかった。また、台風第14号が10日頃にかけて本州の南海上をゆっくり東進し、本州南岸に停滞する前線の活動が活発化した影響等で、東・西日本太平洋側を中心に大雨となった所があったため、月降水量は東・西日本太平洋側で多かった。一方、上旬は沖縄・奄美、中旬は東日本日本海側、下旬は西日本を中心に高気圧に覆われやすかったため、月降水量は東日本日本海側でかなり少なく、月間日照時間は西日本と沖縄・奄美で多かった。

気温は、中旬を中心に北・東・西日本で寒気の影響を受ける時期があったものの、北日本を中心に断続的に暖かい空気が流れ込んだため、北日本で高かった。

11月 気温は、東・西日本と沖縄・奄美でかなり高かった。降水量は、東日本太平洋側でかなり少なかった。日照時間は、東日本日本海側でかなり多かった。

日本付近は高気圧と低気圧や前線の影響を交互に受けたため、全国的に天気は数日の周期で変わったが、低気圧は北日本以北を通過することが多く、本州付近は移動性高気圧に覆われた日が多かった。このため、北日本日本海側で曇りや雨または雪の日が多かったほかは、全国的に晴れた日が多く、東日本日本海側の月間日照時間はかなり多かった。また、日本付近は低気圧の影響を受けにくかったため、月降水量は北日本日本海側と西日本太平洋側を除いて全国的に少なく、東日本太平洋側ではかなり少なかった。

気温は、日本付近に一時的に寒気の流れ込んだ日があったが、中旬の後半を中心に北日本以北を通過する低気圧に向かって南から暖かい空気が流れ込んだため、全国的に高く、東・西日本と沖縄・奄美ではかなり高くなった。特に、18日から20日にかけては本州の広い範囲で夏日となり、11月としての日最高気温の高い方からの1位の記録を更新した所もあった。

12月 北・西日本では気温が低かった。日本海側では、北陸地方を中心に記録的な大雪となった所があった。太平洋側では、降水量は少なかった。沖縄・奄美では、日照時間はかなり少なく、降水量はかなり多かった。

低気圧が数日の周期で日本付近を通過した後、冬型の気圧配置となる日が多く、中旬と下旬後半は日本付近に強い寒気の流れ込んだ。このため、月平均気温は北・西日本で低かった。また、日本海側では曇りや雪または雨の日が多く、北日本日本海側では月間日照時間がかなり少なく、東日本日本海側でも少なかった。15日から16日にかけては冬型の気圧配置が強まったため、東日本日本海側を中心に大雪となり、群馬県藤原や新潟県湯沢では24時間降雪量が1mを超えるなど、記録的な大雪となった所があった。この大雪のため、関越自動車道では多数の車両が立ち往生するなど、大規模な交通障害が発生した。また、農業用ハウスが倒壊するなどの農業施設被害も発生した。30日から31日にかけては、冬型の気圧配置が再び強まったため、日本海側では大雪となった所があり、31日時点での積雪は平年を上回った地点が多かった。一方、太平洋側は低気圧の影響を受けにくかったため、月降水量は北日本太平洋側でかなり少なく、東・西日本太平洋側では少なかった。北日本太平洋側の月降水量は平年比38%

となり、1946年の統計開始以来12月として1位の少雨となった。

沖縄・奄美では、月を通して前線や湿った空気の影響を受けやすかったため、月間日照時間はかなり少なく、平年比は38%と1946年の統計開始以来12月として1位の寡照となった。また、月降水量はかなり多く、8日から9日にかけては前線の活動が活発となり大雨となった所があった。

表1 梅雨入り・梅雨明けの状況（令和2年）

梅雨入り

地域	本年	平年	前年
沖縄	5月16日頃	5月9日頃	5月16日頃
奄美	5月17日頃	5月11日頃	5月14日頃
九州南部	5月30日頃	5月31日頃	5月31日頃
九州北部	6月11日頃	6月5日頃	6月26日頃
四国	6月10日頃	6月5日頃	6月26日頃
中国	6月10日頃	6月7日頃	6月26日頃
近畿	6月10日頃	6月7日頃	6月27日頃
東海	6月10日頃	6月8日頃	6月7日頃
関東甲信	6月11日頃	6月8日頃	6月7日頃
北陸	6月11日頃	6月12日頃	6月7日頃
東北南部	6月11日頃	6月12日頃	6月7日頃
東北北部	6月25日頃	6月14日頃	6月15日頃

梅雨明け

地域	本年	平年	前年
沖縄	6月12日頃	6月23日頃	7月10日頃
奄美	7月20日頃	6月29日頃	7月13日頃
九州南部	7月28日頃	7月14日頃	7月24日頃
九州北部	7月30日頃	7月19日頃	7月25日頃
四国	7月29日頃	7月18日頃	7月25日頃
中国	7月31日頃	7月21日頃	7月25日頃
近畿	8月1日頃	7月21日頃	7月24日頃
東海	8月1日頃	7月21日頃	7月24日頃
関東甲信	8月1日頃	7月21日頃	7月24日頃
北陸	8月1日頃	7月24日頃	7月24日頃
東北南部	8月2日頃	7月25日頃	7月25日頃
東北北部	特定できない	7月28日頃	7月31日頃

注：気象庁資料による。

(2) 被害概況

令和2年の日本への台風の接近数は平年より少ない7個で、そのうち上陸数は0個であったが、台風第10号等の接近に伴う暴風や大雨の影響で、九州や南西諸島、伊豆諸島などで被害が発生した。

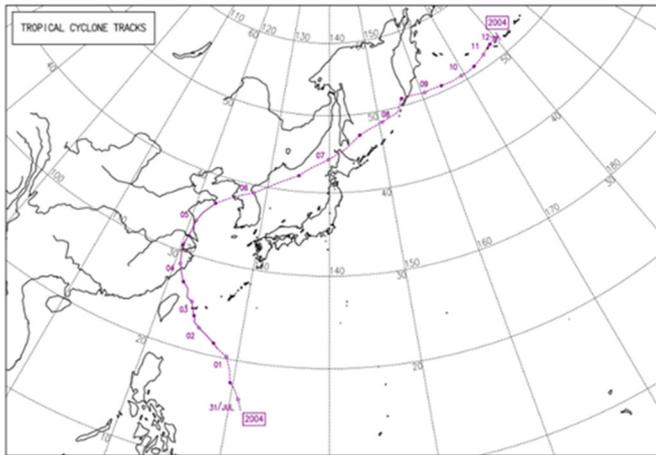
また、活発な梅雨前線の影響で、東・西日本を中心に各地で長期間にわたって大雨（「令和2年7月豪雨」）となった。

これらにより、浸冠水、潮風害、倒伏、落果及び茎葉の損傷等による被害が発生した。

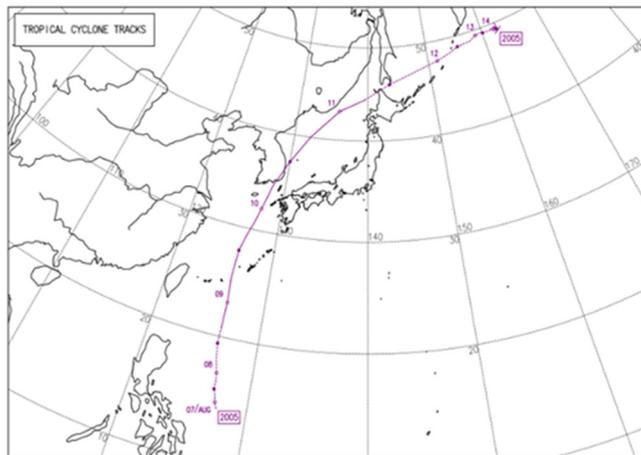
表2 令和2年に発生した主要災害種類別被害概況（総数）

災害種類名	被害発生時期	被害面積	被害見込金額	主な被害農作物	主な被害地域
令和2年 7月豪雨	7月3日～31日	ha 11,500	億円 48	野菜、水陸稲、 果樹	福岡、山形、熊本
台風第9号 及び第10号	9月1日～7日	48,400	31	野菜、水陸稲、 工芸農作物	佐賀、長崎、鹿児島

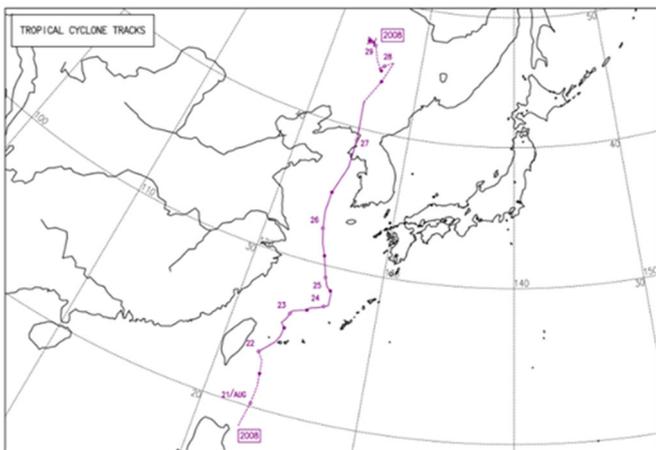
(3) 令和2年に日本列島に上陸・接近した主な台風経路図



台風第4号（接近）【8月】



台風第5号（接近）【8月】



台風第8号（接近）【8月】



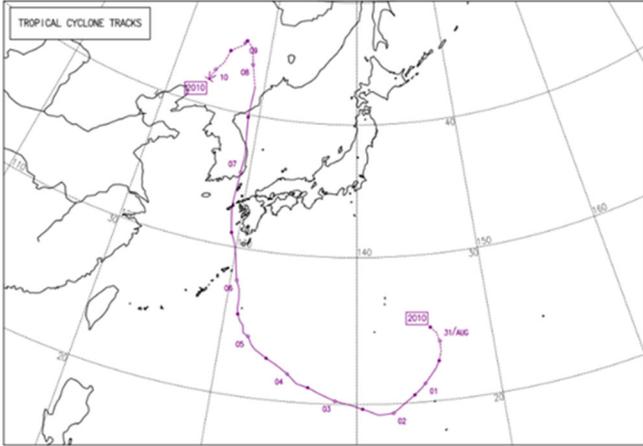
台風第9号（接近）【8月】

注1： 気象庁「台風経路図 令和2年（2020年）」（https://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/typhoon/route_map/bstvt2020.html）より、令和2年に日本列島に上陸・接近した台風の台風経路図を引用した。

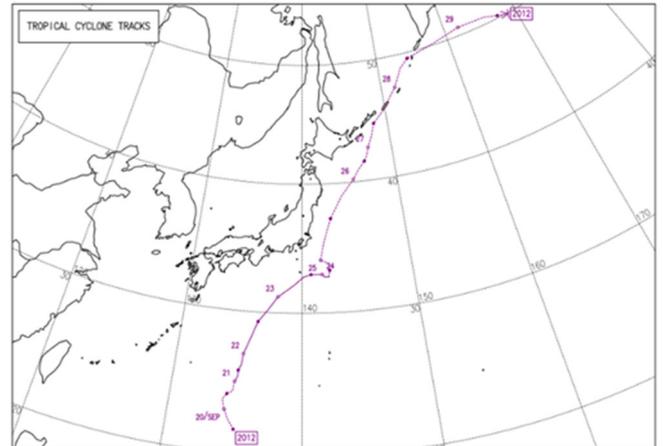
2： 【】内は台風の発生した月を示している。

3： 経路上の○印は傍らに記した日の午前9時、●印は午後9時の位置で→は消滅を示している。また、経路の実線は台風、破線は熱帯低気圧・温帯低気圧の期間を示している。

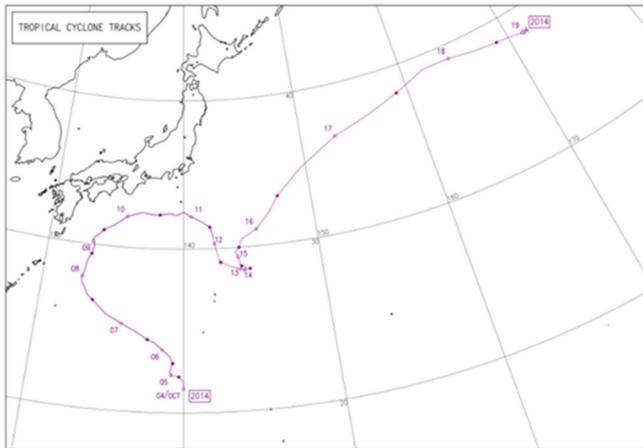
(3) 令和2年に日本列島に上陸・接近した主な台風経路図（続き）



台風第10号(接近)【8月】



台風第12号(接近)【9月】



台風第14号(接近)【10月】